

# 『和泉式部日記』の複合動詞

Yukio Okano : The Combined Verbs of "Izumi-Shikibu-Nikki"

岡 野 幸 夫

## 目 次

- 一 はじめに
- 一・一 目的と方法
- 一・二 先学の研究
- 二 女流日記作品の複合動詞語彙の概観
- 三 和泉式部日記の複合動詞語彙
- 三・一 慣用表現の応用——「あたりさわぐ(当騒・四)」
- 三・二 接頭語の特異な用法——「おしおどころかす(押驚・四)」
- 三・三 素朴な語構成——「ふりふく(降吹・四)」
- 四 おわりに

## 一 はじめに

### 一・一 目的と方法

本研究は、平安時代の女流日記作品の複合動詞語彙を、物語作品のそれと比較し、女流日記作品の複合動詞語彙の特徴を明らかにしようとするものである。これにより、「和文体の内部は均質か」「日記作品と物語作品との間に文体的相違が認められるか」という問題を考察する一階梯としたい。

複合動詞は、単独の動詞では表せない、動作主体の複雑微妙な動きを表わし分けるものであり、作品やジャンル・時代による相違が認められることが期待される語彙のカテゴリーである。したがって、右の問題を考察する上で有効な視点になると思われる。

本稿では、まず基礎段階として、日記作品の複合動詞語彙を数量的に概観する。そして、和泉式部日記を取り上げ、他の平安時代の物語作品に用いられていない複合動詞について検討し、和泉式部日記の複合動詞語彙の特徴を考察する。<sup>(注二)</sup>

数量的概観にあたっては、既刊の索引類を用いて複合動詞語彙の一覧を作成した。<sup>(注一)</sup> 一覧の作成に際しては、誤植・単純な誤謬はもとよ

り、不審な例については本文を検討してできる限り正確を期した。和泉式部日記については本文を通読し、紫式部日記については索引の用例部分に目を通し複合動詞を収集した。また、索引による複合動詞認定の「ゆれ」の統一をはかった。

数量的概観をふまえ、和泉式部日記の複合動詞について検討する。その際、平安時代和文学作品における類似の複合動詞の有無・意味用法にも注意しつつ検討する。<sup>(注三)</sup>

## 一・二 先学の研究

本稿に関係が深い先学の研究には以下のものがある。<sup>(注四)</sup>

竹内美智子氏は、竹内1で和泉式部日記の諸本の語彙を調査し、系統が異なる諸本間でも総語彙数には顕著な差はみられないことを明らかにした。また、最も異文を生じやすい語彙は動詞、しかも「動詞＋動詞」「名詞＋動詞」型の複合動詞であることも明らかにしている。また、竹内2では、和泉式部日記の語彙は源氏物語との共通度が高いことを明らかにしている。その理由について、氏は保留しているが、第二節で私見を述べたい。

松田三千代氏は、紫式部日記の複合動詞語彙を調査し、蜻蛉日記や枕草子と比較して相対的な語彙量が多い（とくに三語からなる複合動詞が多い）こと、使用頻度「一」の語が大半を占めていること、構成要素は普通の動詞だが、その組合せにより独自の複合動詞を構成していることなどを明らかにした。本稿は紫式部日記についての具体的な検討を行ない得ていないが、大筋において従うべき見解であると思われる。

山口仲美氏は、山口1で和泉式部日記の文体上の特徴を検討し、和

歌と散文とが構文上の関係を持ち、自然に融合していること、修辭の少ない和歌が多く、日常会話語を和歌に用いていることなどを明らかにした。また、山口2では、和泉式部日記について視点論の立場から、第三者的な語り手の存在を指摘し、多数の物語的場面を持つことや、必ずしも史実と一致しない叙述がみられることから、物語を意図して執筆された主張している。これらの事柄が複合動詞語彙に何らかの形で反映しているか、第三節で述べたい。

## 二 女流日記作品の複合動詞語彙の概観

稿末のへ表1を参照されたい。この表は、各女流日記作品の複合動詞の語彙量と使用率とをまとめたものである。

この表から、以下の事柄が読み取れる。

- 複合動詞の語彙量は作品の言語量にほぼ対応している
- 動詞語彙に占める複合動詞語彙の割合も作品の言語量にほぼ対応している（多少の前後はあるものの、およそ五〇％弱の割合）
- これらのことから、複合動詞語彙は作品の叙述の展開上、重要な役割を果たしており、複合動詞を視点とした文体研究の可能性は決して小さくないことがわかる。
- 一語あたりの使用頻度が高いのは蜻蛉日記・讃岐典侍日記で、逆に低いのは紫式部日記・和泉式部日記・更級日記である
- 一頁あたりの使用率が高いのは更級日記・紫式部日記で、逆に低いのは和泉式部日記・蜻蛉日記・讃岐典侍日記である
- これらのことから、紫式部日記と更級日記とは、使用頻度の低い複合動詞を他の日記作品よりも多く使用する傾向にあることがわかる。

この点はへ表2への度数分布からも読み取ることができる。

次にへ表3を参照されたい。この表は、女流日記作品と平安時代和文作品との共通度をまとめたものである。女流日記作品の個々の複合動詞を、他の平安時代和文作品における用例の有無で二分し、用例が存するものについては、さらに日記にのみ存するもの・物語にのみ存するもの・両方に存するものと三分している。

この表から、以下の事柄が読み取れる。

○日記作品にのみ共通して用いられる複合動詞は非常に少ない

このことから、女流日記作品の特徴を考察するためには、単に用例の有無のみでなく、意味用法にも注目した検討が必要であることがわかる。

○独自語彙が多いのは蜻蛉日記・紫式部日記で、逆に少ないのは和泉式部日記・更級日記・讃岐典侍日記である

○物語作品との共通度が高いのは和泉式部日記・更級日記・讃岐典侍日記で、逆に低いのは蜻蛉日記・紫式部日記である

この二点目と三点目とは、ほぼ表裏関係にあると思われるが、あるいは作品の言語量が反映した可能性もある。すなわち、言語量が多い作品ほど独自語彙が増え、物語作品との共通度が低くなるということである。

参考として、鎌倉時代の女流日記作品である「とはずがたり」についても同様な調査を行なった結果、蜻蛉日記とよく似た傾向であることが明らかになった。これは、時代を超えた女流日記作品の共通点である可能性がある。

次にへ表4を参照されたい。この表は、女流日記作品同士の共通度をまとめたものである。

この表から、以下の事柄が読み取れる。

○「共通度」は作品の言語量に反比例している

これは作品の言語量が増えるほど、他の作品との共通部分の比率が下がるということを表わしていると考えられる。竹内2で保留とされていたことは、この現象によるものであると考えられる。

○日記作品との共通度が高いのは和泉式部日記・更級日記・讃岐典侍日記で、逆に低いのは蜻蛉日記・紫式部日記である

この点と、先に述べたへ表3への第三点目、すなわち蜻蛉日記と紫式部日記とは物語作品との共通度が低い、ということを考えあわせると、蜻蛉日記と紫式部日記とは、他の平安時代和文作品とはやや遠い位置にある作品であることになる。もともと、これも作品の言語量を反映した可能性があるため、確定的なことは言えない。

次にへ表5を参照されたい。この表は、女流日記作品同士の複合動詞語彙の重なりをまとめたものである。

この表から、以下の事柄が読み取れる。

○一作品のみに使用される複合動詞が全体の七八%を占める（そのうち約六五%が物語作品にも用いられている）

○三作品以上に共通する複合動詞はすべて物語作品にも用いられている（二作品に共通するものもほとんどが物語作品にも用いられている）

これらのことから、女流日記作品に独自の複合動詞は、互いに重なり合う部分がほとんどないということがわかる。

以上、本節では以下の点が明らかになった。女流日記作品同士で比較すると、各作品に独自の複合動詞が大半を占めるものの、和文作品全体から見ると、女流日記作品に独自と言える複合動詞はあまり多く

ない。これは女流日記作品の言語量と物語作品の言語量との格差が原因かとも思われる。ただ、女流日記作品に独自の複合動詞は互いに重なり合うことなく存在している。つまり、女流日記作品はそれぞれが個性的なのであって、個々の作品についてその特徴を明らかにするといった方向で検討を進める必要がある<sup>(注六)</sup>。

### 三 和泉式部日記の複合動詞語彙

前節での概観をふまえ、本節では和泉式部日記の複合動詞語彙を検討する。以下、平安時代の物語作品に用いられない複合動詞の検討を行ない、和泉式部日記の複合動詞の特徴の一端を明らかにしたい。

平安時代の物語作品に用いられない複合動詞(全十七語)は以下の通り<sup>(注七)</sup>。

※あたりさわぐ(当騒・四)、いでひろめく(出広・四)、※おしおどろかす(押驚・四)、かきゐる(書居・上二)、きこえたゆ(聞絶・下二)、きやむ(着止・四)、くらがりもてゆく(暗持行・四)、さそひみる(誘見・上二)、たたきやむ(叩止・四)、たまはせそむ(賜初・下二)、なききかす(鳴聞・下二)、△はぢかくる(恥隠・下二)、ふみつくる(踏作・四)、△ふりはつ(降果／古果・下二)、※ふりふく(降吹・四)、めぐりありく(巡歩・四)、やすらひかぬ(休難・下二)

右の複合動詞のうち、△印を付したものは物語作品以外に用例が存する。すなわち「はぢかくる(恥隠・下二)」は枕草子(二二段)に、「ふりはつ(降果／古果・下二)」は詞花和歌集(巻第一・春・四〇〇)に、それぞれ用例が存する。それ以外はすべて和泉式部日記にのみ用

例が存する複合動詞である。

現段階では、これらの複合動詞が平安時代の物語作品に用いられていないことが明らかになっただけで、これらに共通する性質等は明らかにし得ていない。ただ、※印を付した「あたりさわぐ(当騒・四)」「おしおどろかす(押驚・四)」「ふりふく(降吹・四)」に関して注目すべき事柄を見出し得たので、以下検討する。

#### 三・一 慣用表現の応用——「あたりさわぐ(当騒・四)」

まず、和泉式部日記の用例を掲げる。

○あやし、たれならんと思ひて、まへなる人をおこしてとはせんとすれど、とみにもおきず。からうじておこしても、こゝかしこのものにあたりさわぐほどに、たたきやみぬ。<sup>(和泉式部日記)</sup>

この用例は、宮が式部のもとを訪れるが、式部方では取り次ぎが遅れてしまったという場面である。取り次ぎの女房の寝ぼけ慌てた様子が「ものにあたりさわぐ」と表現されている。前述したように、「あたりさわぐ」は平安時代和文作品に用例が存しないが、「ものにあたる」という慣用的表現が散見する。

▽いまはさりとともとおもひたゆみたりつるに、あさましなければ、との、うちの人、ものにぞあたる。<sup>(源氏物語・葵)</sup>

この用例は、源氏の留守中に葵上が急死してしまう場面である。油断していて不意を突かれた家人の慌て惑うさまが表現されている。

▽げす女にとへば、「うへの、こよひにはかにうせ給にければ、物もおほえ給はず。たのもしき人もおはしまさぬおりなれば、さぶらひ給人くは、たゞものにあたりてなむまどひ給」といふ。<sup>(源氏物語・蜻蛉)</sup>



この用例は、浮舟が失踪して人々が混乱しているところへ、勾宮の使者がやってくる場面である。これらの他、栄花物語（五例）、とりかへばや物語、枕草子（各一例）にも用例が存する。悲しい状況で用いられることが多い（全九例中六例）が、中には次の用例のように喜ばしい状況で用いられることもある。

▽かく云程につくしに聞給て、あさましうれしくて、物にぞあたらせ給。  
（栄花物語・巻第五）

この用例は、筑紫にいたる伊周が、一条帝皇子敦康親王（母中宮定子）誕生の知らせを聞き喜ぶ場面である。

和泉式部日記の「（こかしこのものに）あたりさわぐ」は、「ものにあたる」という慣用的表現を拡張発展させ、表現を深化させたものと考えることができる。

以上のような慣用的表現の応用としては、「うちふく（打更・下二）」を類例として挙げることができる。

○おもひかけぬほどなるを、心やゆきてとあはれにおぼえて、つまどおしあけてみれば

見るや君さ夜うちふけて山のはにくまなくすめる秋の夜の月うちながめられて、つねよりもあはれにおぼゆ。  
（和泉式部日記）

この用例は、宮から式部へ和歌が贈られてきた場面である。「うちふく」は平安時代和文学作品では蜻蛉日記（三例）、夜の寝覚（二例）、落窪物語、宇津保物語、浜松中納言物語、枕草子（各一例）に用例を見出すことができる。以下に若干の用例を示す。

▽夜うちふけて外の方を見いだしたれば、堂はたかくて、下は谷とみえたり。  
（蜻蛉日記・中）

この用例は、石山に詣でた作者が、本堂から外を見る場面である。

▽四月五六日のほどに、日うちくる、ほどに、京をいで給て、月もいとすかに、道たどくしきを、心のゆくにまかせて、ようちふくほどに、いし山にまうで、さるべき人のぼうにたちかくれて、僧都たづねて、せうそこせさせ給ひたれば、おどろきてまいりたり。  
（夜の寝覚・巻二）

この用例は、主人公の大納言が石山に女主人公を見舞う場面である。

これらの用例はいずれも地の文の用例で、和歌に用いられた例は一例もない。一方、類似した「さよふく（小夜更く）」という表現が和歌を中心に盛んに用いられている。これも以下に若干の用例を示す。  
▽としこちかぬをまちけるよ、こざりければ、

さ夜ふけていなおほせどりのなきけるを

きみがた、くとおもひけるかな  
（大和物語・六六段）

この用例は、藤原千兼を待つ妻としこの和歌である。

▽のほりつきたりし時、これ手本にせよとて、このひめぎみの御ををとらせたりしを、「さ夜ふけてねざめざりせば」などかきて、

（更級日記）

この用例は、藤原行成女の手跡を手本にしていた作者が、彼女の計報に接して悲しむ場面である。

すなわち、和泉式部日記の「（さよ）うちふく」という表現は、散文における「夜うちふく」表現と、和歌における「さよふく」表現とを混交させた表現であるといえ、これも慣用的表現を応用したものと考えられるのである。先学の研究（山口一）で、和歌と散文の混交という指摘があったが、このような形で混交が行われていることも明らかになった。

### 三・二 接頭語の特異な用法——「おしおどろかす（押驚・四）」

ここでもまず、和泉式部日記の用例を掲げる。

○あはれにおぼされて、女ねたるやうにて思ひみだれてふしたるを、

おしおどろかさせたまひて、

時雨にも露にもあてでねたるよを

あやしくぬるるたまくらので

との給へど、よろづにもののみわりなくおぼえて、（和泉式部日記）

この用例は、宮が式部に和歌を詠みかける場面である。ただし「お

しおどろかさせ」の部分には異同があり、寛元本は「おどろかし」、

応永本は「や、おどろかし」となっているため、確例とはみなせない

かもしれない。<sup>(注九)</sup>「おしおどろかす」は前述したように平安時代和文作

品に用例が存しないが、『日本国語大辞典』（第二版）によれば、和泉

式部日記の他、肥前国風土記、義経記、日葡辞書の用例が掲げられて

おり、語の存在自体は否定しがたい。しかし、平安時代和文において

は「ひきおどろかす」を用いるのが普通であったと思われる。源氏物

語、栄花物語、とりかへばや物語（各一例）に用例が存する。

▽この内侍、つねよりもきよげにやうだいかしらつきなまめきて、さ

うぞくありさまいと花やかにこのましげにみゆるを、さもふりがた

うもと心づきなくみたまふ物から、いかゞおもふらんとさすがにす

ぐしがたくて、ものすそをひきおどろかし給へれば、

（源氏物語・紅葉賀）

この用例は、源氏が源内侍と和歌をやり取りする場面である。「引

く」対象として「裳の裾」が明記されており、「ひき」は未だ接頭語

化せず独立を保っていると考えられるが、時代が下るにつれ接頭語化

が進んでいるように思われる。

▽すべて御いらへもなくおどろかせ給はねば、よりて「や、」ときこ

えさせ給に、ことのほかにみえさせ給へれば、ひきおどろかしたて

まつり給に、やがてひえさせ給へれば、あさましうて、

（栄花物語・巻第二）

この用例は、冷泉院女御超子（兼家女）が頓死した場面である。

▽つくぐと思ひあかして、かたみにとみにもおきあがらず、そむき

くにて、「おきいで給」とて、女君をひきおどろかすに、いよく

ひきかづきまさり給へば、

この用例は、女中納言が妻の懷妊に驚き怪しむ場面である。

一見、「おしおどろかす」と「ひきおどろかす」とでは動作の方向

性が逆になるだけで、結局は同じ様な動作になるようにも見えるが、

関一雄氏が主張するように、平安時代和文としての「おし」は「相

手の領分（向こう側）への方向性」を持ち、一方の「ひき」は「自分

の領分（こちら側）への方向性」を持つと考えるならば、相手の注意

を喚起する目的を持った「揺り起こす」動作に「おし」は馴染まない

ようにも思われる。もしそうであるならば、この接頭語「おし」は用

語選択上、特異な例であるということになる。今後、接頭語「おし」

「ひき」の意味や表現価値について研究を進める必要があるが、こ

では問題を確認するにとどめる。<sup>(注十)</sup>

### 三・三 素朴な語構成——「ふりふく（降吹・四）」

ここでもまず、和泉式部日記の用例を掲げる。

○かくのみたえずの給はすれど、おはします事はかたし。雨かせなど

いたうふり吹く日しもおとづれ給はねば、人ずくななる所の風のお

とをおほしやらぬなめりかし、とおもひてくれつかたきゆ。

(和泉式部日記)

この用例は、宮の訪れが途絶えがちになり、式部が宮に和歌を贈る場面である。「あめ+かぜ」と「ふり+ふく」とが平行的に対応している。一方、これと極めてよく似た複合動詞「ふりふぶく(降吹風・四)」が女流日記作品には用いられている。以下その用例(全二例)を掲げる。

▽それよりたつほどに、雨<sup>あめ</sup>かぜ<sup>かぜ</sup>いみじくふりふぶく。みかさやまをさしてゆくかひもなく、ぬれまどふ人おほかり。(蜻蛉日記・中)

この用例は、初瀬詣での途上、風雨に遭う場面である。

▽冬になりて、のぼるに、おほつといふうらに舟にのりたるに、その夜、雨<sup>あめ</sup>風<sup>かぜ</sup>、いはもうごく許<sup>ゆる</sup>ふりふぶきて、神さへなりてとゞろくに、  
(更級日記)

この用例は、東国から京都に上る途上の作者一行が、大津で風雨に遭う場面である。

これらの用例はいずれも「あめ+かぜ」と「ふる+ふぶく」とが平行的に対応している点で「ふりふく」に通ずる。

平安時代の物語作品には「ふりふく」「ふりふぶく」とともに用例は存せず、しいて類似の複合動詞を挙げるとすれば、源氏物語に「ふきふぶく(吹風・四)」が見られる程度である。

▽風はげしう吹<sup>ふ</sup>ふぶきて、みすのうちのにほひ、いともふかきくろぼうにしみて、みやうがうのけぶりもほのかなり。

(源氏物語・賢木)

この用例は、藤壺が突然出家し、訪れた源氏と和歌を詠み交わす場面である。しかし、これは「吹く」の強調表現と考えられるもので、女流日記作品に見られた「ふりふく」「ふりふぶく」とは語構成が異

なっている。

すなわち、「あめかぜ」が「ふりふく」「ふりふぶく」という表現は女流日記作品にのみ見られるのである。ここで「風雨」に関する表現法を調べてみると、大きく以下の三つに分類できることが明らかにになった。

ア、「あめ」と「かぜ」とを別々に用いた対句的表現

▽雨すこしうちそ、くに、風はいとひや、かにふきいりて、いひしらずかほりくれば、  
(源氏物語・東屋)

▽つごもりがたに、風いたくふきてのわきだちて雨などふるに、つねよりももの心ほそくてながむるに、御ふみあり。(和泉式部日記)  
イ、「あめかぜ」と述語とが平行的に対応する表現  
(前掲の女流日記作品の用例を参照)

ウ、「あめかぜ」と述語とが平行的に対応しない表現

▽卅日。あめかぜふかず。  
(土左日記・正月三十日)

▽なを雨<sup>あめ</sup>風<sup>かぜ</sup>やまず、神、なりしづまらで日ごろになりぬ。

(源氏物語・明石)

これらの各用法のうち、用法ア・ウは平安時代和文作品に共通して見られるが、用法イは女流日記作品にしか認められない。用法アは「あめ」と「かぜ」とをそれぞれ独立したものとみなし、それぞれに細密な叙述を行なうことを可能にしている。また、用法ウは「あめかぜ」を完全に一語と捉え、簡潔な叙述を生み出している。これに対し、用法イは女流日記作品においていかなる意味を持っているのか、現段階では「素朴な語構成」という以上の結論を出すにはいたっていない。今後、このような、動作主体と平行的な語構成を持つ複合動詞の類例を発見・検討する必要がある。

## 四 おわりに

本稿で述べてきたことをまとめると以下になる。

まず、数量的概観では、物語作品には用いられず、かつ複数の女流日記作品に共通して用いられる複合動詞は非常に少ないことが明らかになった。また、女流日記作品に独自の複合動詞は互いに重なり合うことなく存在している。つまり、女流日記作品の複合動詞語彙はそれぞれが個性的であることがわかる。個々の女流日記作品では、紫式部日記と更級日記とは、使用頻度の低い複合動詞を他の日記作品よりも多く使用する傾向にあることがわかった。また、蜻蛉日記と紫式部日記とは、他の平安時代和文作品とはやや遠い位置にある作品であることもわかった。また、とはずがたりは蜻蛉日記とよく似た傾向を示す。これは、時代を超えた女流日記作品の共通点である可能性がある。

次に、和泉式部日記の複合動詞語彙を検討した結果、複合動詞による慣用的表現の深化が見られる一方、接頭語を用いた複合動詞には用語選択意識の弱さを疑わせる例も存在することが明らかになった。

本稿で検討し得たのは、女流日記作品の中でも最も言語量の少ない和泉式部日記の、しかも物語作品に用いられないごく一部の複合動詞にすぎない。今後、物語作品に用いられる複合動詞の検討も合わせて行ない、和泉式部日記の複合動詞の特徴を明らかにしてゆく必要がある。他の作品についても同様で、最終的に女流日記作品のジャンルとしての特徴として総合できるかどうかの見通しも立てねばならない。また、物語作品の複合動詞の検討を通じて「物語作品独特の用法」が

存在するかどうかを検証する必要があり、文字通り課題は山積している。

## (注)

一、和泉式部日記は、その文章が物語的であるといわれ、作者についても少数派ながら他作説も行なわれている。したがって、必ずしも「日記」作品の特徴が現われていない可能性はある。しかし本稿では、通説にしたがって考察した。

二、本稿で使用した女流日記作品の索引は以下の通り。

佐伯梅友・伊牟田経久編『改訂新版かげろふ日記総索引』（風間書房・昭和五六）

東節夫・塚原鉄雄・前田欣吾編『和泉式部日記総索引』（武蔵野書院・昭和三四）

今西祐一郎・上田英代・村上征勝編『紫式部日記語彙用例総索引』（勉誠社・平成九）

東節夫・塚原鉄雄・前田欣吾編『更級日記総索引』（武蔵野書院・昭和三二）

今小路寛瑞・三谷幸子著『校本讃岐典侍日記』（初音書房・昭和四二）

三、本稿で検索した（注二）以外の平安時代和文作品は以下の通り。

土左日記・竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語・落窪物語・宇津保物語・多武峯

少将物語・篁物語・枕草子・源氏物語・狭衣物語・夜の寝覚・浜松中納言物語・大鏡・

栄花物語・堤中納言物語・とりかへばや（既刊の語彙索引類を利用）

四、先学の研究は以下の通り。

竹内一「和泉式部日記の語彙についての基礎的研究」〔国文目録〕二・昭和三八・三三

竹内二「和泉式部日記の語彙に関する一考察」〔国語学〕五三・昭和三八・六

※いずれも竹内美智子『平安時代和文の研究』（明治書院・昭和六二）所収。

松田三千代「紫式部日記の複合動詞」〔成蹊国文〕一〇・昭和五二・三二

山口一「和泉式部日記」の文体〔日本の文学〕二・有精堂・昭和六三

山口二「和泉式部日記」作者の意図〔王朝日記の新研究〕笠間書院・平成七

※いずれも山口仲美『平安朝の言葉と文体』（風間書房・平成一〇）所収。

五、拙稿「とはすがたり」の複合動詞―数量的概観―」（『鎌倉時代語研究』二三・平成二一・一〇）

六、同様の検討を物語作品についても行なう必要がもちろんある。

七、この十七語の他、次の四語も語形レベルでは平安時代和文作品に用例は存しないが、括弧内に示したように非敬語形の用例が存しているので、対象から除外した。

きこえさる（聞切・四）（「いひさる」源氏物語）、きこえさせす（聞過・四）（「いひすぐす」枕草子・堤中納言物語）、きこしめしなほす（聞召直・四）（「ききなほす」枕草子）、ごらんじもてゆく（御覧持行・四）（「みもてゆく」源氏物語・紫式部日記・夜の寝覚・とりかへばや、「みもていく」蜻蛉日記）

八、片桐洋一著『歌枕歌ことば辞典増訂版』（笠間書院・平成二二）には「さよ【小夜】」は接頭語で「夜」のこと。「さよふけて」という形でよまれることが多かった（以下省略）とある。平安時代の勅撰集にも枚挙に遑がない。

九、本文の異同の確認には伊藤鉄也編『四本対照和泉式部日記―校異と語彙索引―』（和泉書院・平成三年）を利用した。

十、関一雄「『源氏物語』の派生動詞―接頭語による物語用語づくり―」（『平安時代和文語の研究』笠間書院・平成五）

※初出「源氏物語の派生動詞（一）―接頭語による物語用語づくり―」（『山口大学文学会志』昭和六三・同（二）『山口国文』第一号・昭和六三）

十一、本稿では検討し得なかったが、「おしたがふ（押達・下二）（一例）も平安時代和文作品においては稀少な語（他に栄花物語に一例のみ）で、よりふつうに用いられている「ひきたがふ」との関係が興味深い。

〈表1〉複合動詞の語彙量と使用率

	蜻 蛉	和 泉	紫	更 級	讃 岐	合 計
異 (延)	727 (1,295)	172 (241)	393 (542)	335 (477)	263 (429)	1,417 (2,984)
使用頻度	1.78	1.40	1.38	1.42	1.63	
動 詞	1,373(52.9%)	414 (41.5%)	837 (47.0%)	693 (48.3%)	633 (41.5%)	
言 語 量	269 (4.8)	67 (3.6)	97 (5.6)	79 (6.0)	86 (5.0)	

※「使用頻度」の数値は延べ語数を異なり語数で割った値。

※「動詞」の数値は宮島（蜻蛉・紫・更級）、竹内（和泉）、大野（讃岐）による（異なり語数）。

（括弧内の数値は複合動詞の占める割合）

〈参考文献〉

○大野晋「基本語彙に関する二、三の研究」（『文法と語彙』岩波書店・昭和六二） 初出『国語学』二四・昭和三一

○竹内美智子「和泉式部日記の諸本とその語彙」（『平安時代和文の研究』明治書院・昭和六一） 初出「和泉式部日記の語彙についての基礎的研究」『国文目白（日本女子大学）』二・昭和三八

○宮島達夫『古典対照語い表』（笠間書院・平成四・三版）

※「言語量」は小学館日本古典文学全集（旧版）の頁数による（括弧内の数値は使用率）。

〈表2〉度数分布表

	蜻 蛉	和 泉	紫	更 級	讃 岐
1 回	505 (69.5%)	137 (79.7%)	307 (78.1%)	262 (78.2%)	193 (73.4%)
2 回	112 (15.4%)	19 (11.0%)	55 (14.0%)	45 (13.4%)	40 (15.2%)
3 回	41 ( 5.6%)	10 ( 5.8%)	16 ( 4.1%)	15 ( 4.4%)	11 ( 4.2%)
4 回	21 ( 2.9%)	—	7 ( 1.8%)	4 ( 1.2%)	6 ( 2.3%)
5 回	14 ( 1.9%)	2 ( 1.2%)	3 ( 0.8%)	3 ( 0.9%)	4 ( 1.5%)
6 回	12 ( 1.7%)	2 ( 1.2%)	2 ( 0.5%)	3 ( 0.9%)	4 ( 1.5%)
7 回	7 ( 1.0%)	2 ( 1.2%)	2 ( 0.5%)	2 ( 0.6%)	2 ( 0.8%)
8 回	2 ( 0.3%)	—	1 ( 0.3%)	—	2 ( 0.8%)
9 回	3 ( 0.4%)	—	—	—	—
10回以上	10 ( 1.4%)	—	—	1 ( 0.3%)	1 ( 0.4%)
合 計	727	172	393	335	263

〈表3〉平安時代和文作品との共通度

			蜻 蛉	和 泉	紫	更 級	讃 岐	と は ず
平安時代 和文に	あ	日記	8 ( 1.1%)	—	2 ( 0.5%)	7 ( 2.1%)	3 ( 1.1%)	20 ( 2.7%)
		共通	236 (32.5%)	99 (57.6%)	154 (39.2%)	158 (47.2%)	118 (44.9%)	333 (45.4%)
		物語	300 (41.3%)	52 (30.2%)	144 (36.6%)	122 (36.4%)	97 (36.9%)	181 (24.7%)
	り	小計	544 (74.8%)	151 (87.8%)	300 (76.3%)	287 (85.7%)	218 (82.9%)	534 (72.8%)
	な	し	183 (25.2%)	21 (12.2%)	93 (23.7%)	48 (14.3%)	45 (17.1%)	200 (27.2%)
合 計			727	172	393	335	263	734

〈表4〉女流日記作品同士の共通度

	蜻 蛉	和 泉	紫	更 級	讃 岐
蜻 蛉	—	72 (41.9%)	109 (27.7%)	125 (37.3%)	89 (33.8%)
和 泉	72 ( 9.9%)	—	44 (11.2%)	44 (13.1%)	31 (11.8%)
紫	109 (15.0%)	44 (25.6%)	—	72 (21.5%)	56 (21.3%)
更 級	125 (17.2%)	44 (25.6%)	72 (18.3%)	—	54 (20.5%)
讃 岐	89 (12.2%)	31 (18.0%)	56 (14.2%)	54 (16.1%)	—
小 計	244 (33.6%)	99 (57.6%)	156 (39.7%)	165 (49.3%)	121 (46.0%)
な し	483 (66.4%)	73 (42.4%)	237 (60.3%)	170 (50.7%)	142 (54.0%)
合 計	727	172	393	335	263

※「小計」は作品間の重なりを除外してあるので単純な合計値より低くなっている。

※「なし」は女流日記作品にみられないことを表わす。

〈表5〉女流日記作品同士の複合動詞語彙の重複度

	蜻 蛉	和 泉	紫	更 級	讃 岐	合 計	物 語
1 作品	483 (66.4%)	73 (42.4%)	237 (60.3%)	170 (50.7%)	142 (54.0%)	1105(78.0%)	715 ( 64.7%)
2 作品	144 (19.8%)	47 (27.3%)	77 (19.6%)	80 (23.9%)	56 (21.3%)	202(14.3%)	192 ( 95.0%)
3 作品	60 ( 8.3%)	23 (13.4%)	44 (11.2%)	51 (15.2%)	32 (12.2%)	70( 4.9%)	70 (100.0%)
4 作品	29 ( 4.0%)	18 (10.5%)	24 ( 6.1%)	23 ( 6.9%)	22 ( 8.4%)	29( 2.0%)	29 (100.0%)
5 作品	11 ( 1.5%)	11 ( 6.4%)	11 ( 2.8%)	11 ( 3.3%)	11 ( 4.2%)	11( 0.8%)	11 (100.0%)
合 計	727	172	393	335	263	1417	1017 ( 71.8%)